

えっ？

平凡ですよ??

4



▲オリヴィリア伯爵夫妻▲

リアナの両親。とてもお人好し。
子供達を溺愛している。

▲ジェレミー▲

シリウスのお師匠様。
大変な変わり者。



▲ラディウス▲

リアナの弟。
勇者が冒険する
お話が大好き。

▲レティシア▲

リアナの妹。
可愛いお姫様に
憧れている。



ゆかり▶

平凡な女子高生
だったが、不慮の
事故で命を落とし、
リアナとして
転生する。



▲シリウス▲

リアナの実家庭教師。
美形だが、いつも無表情。



▲リアナ▲

前世のママ知識で、
異世界の暮らしを改善していた少女。
けれど人々から注目されないよう、
地味に生きることを決意した。

▲ルーチェ▲

ある日、領主館に現れた女の子。
なぜかリアナのことを
ママと呼んでいて……？

登場人物
紹介

目次

えっ？ 平凡ですよ??
4

かくれんぼ

283

7

えっ？
平凡ですよ??
4

第一章 秘密を隠す者と貪婪な知識欲を抱く者

冬も過ぎ去り、眠っていた動物達が目を覚ました。花々は美しく咲き乱れ、暖かな春風が池の水みなを撫なでてキラキラと輝かせる。

気持ちの良い春うらかな日和ひよりです。

だけど、私の心はのどかな春とは対照的に曇くもっていた。

「どうして、私には魔法の才能がないのー!」

私は、やりきれない気持ちを澄み渡る青空に向かって吐き出した。

「魔法の才能はあります。ないのは魔法の制御能力です」

隣にいたシリウス先生が、冷静に切り返す。

そう、私は今、家から程近い森でシリウス先生と一緒に魔法の練習をしていたんだ。

「うう、シリウス先生。とどめをさすのはやめてください」

先生に悪気がまったくないのはわかっています。

ですが、さすがの私も傷つきますよ。たとえ、それが凶星だったとしてもね。

私は自らの境遇を思い返し、遠い目をして空を眺めた。

私はリリアナ・ラ・オリヴィリア、十二歳。

そして過去に、もう一つの名前がありました。

その名は、橘たちばなゆかり。日本という国で、女子高生として生きていました。

だけど交通事故に遭あってしまい、気づけば赤ちゃんになっていたんだから驚きだよね。

そう、どうやら私、転生したみたいなんです。

しかもここは、地球と似ているようで異なる世界…魔法が使えて精霊も存在する、異世界セイルレン。

そんな異世界のシエルフィールド王国オリヴィリア領にて、私は新たな生を受けたのだった。

最初は、戸惑いの連続。それも当然だよね。何せ、元・女子高生がいきなり赤ちゃん…強制的に授乳やオムツの…いやいや、思い返しちやいかん。うん、黒歴史。そこには決して触れてはいけません。

転生後、問題は盛りだくさんだった。

セイルレンで使用されている言語は地球と異なっていたため、習得するのも一苦労だったのです。

そして何より大変だったのは、こちらの世界の生活水準が中世ヨーロッパレベルだったこと。現代の日本で生きていた私にしてみれば、不便ふびん極まりない世界だったのです。

さらに、私が生まれたオリヴィリア家は、家計が火の車な貧乏伯爵家。

領主をやっているお父様と、おっとりしたお母様。二人とも領民達のことを第一に考えていて、

贅沢な暮らしなんてできません。

「だけど、私はそこで活路を見出したの！」

「せっかく転生前の知識があるのに、活かさない手はないでしょ。」

私は大切な家族のために生活を向上させるべく、元・日本人としての知識を活用することにしました。

地球にあった料理を作ったり、ドレスをデザインしたり、スゴロクみたいな遊び道具を作ったり……

「うん、たいしたことはしてないよね。」

私は、ずっとそう思っていた。

でも、その認識はどうやら大間違いだったようです。

私が九歳のとき、オリヴィリア領に『瘴気』という病が襲いかかりました。今では、その年のことを『災厄の年』と呼ぶ者もいる。

何せ瘴気は、薬も魔法も効かず、死者が出るほどの病だったのだから。

瘴気が発生すると、お父様はすぐさまオリヴィリア領に箱口令を敷きました。

「だけど、人の口に戸は立てられぬ、とは上手く言ったもの。箱口令を敷いたにもかかわらず、瘴気の噂は人々の不安をおおるみたいに広がっていつてしまったの。」

不安に駆られた領民達は言いました。

「今まで、たくさんの知識や技術を世に広めてきた私になら、奇跡を起こせるはず。何より、私は

神々の一族の末裔なのだから、と。

そのとき、私ははじめて己がしてきたことの意味を知った。

「そう。私は、あまりにも前世と同じ感覚で行動しすぎていたのです。」

それに、問題は他にもありました。

私の生まれたオリヴィリア家は、なんと美と愛と豊穡の女神様がご先祖様なのだそうです！

「はるか昔、美と愛と豊穡の女神様は、双子を生んだ。」

「やがて双子は成長し、一人はシエルフィールド王国を建国して始祖様に、もう一人はアルディーナ大公爵家の祖となった。」

オリヴィリア家は、このアルディーナ大公爵家の分家にあたるのだそうです。

「だから領民達は、私のことを神々の一族の末裔だと言ったんだね。」

「小さく息をついて池に近寄ると、水面に私の姿が映し出される。」

お母様譲りの銀髪に、お父様譲りの紫水晶色の瞳をした少女。水面に映った私は、複雑そうに顔を歪めていた。

「まだ何も知らなかった頃、大好きな両親の色をそれぞれ受け継ぐことができ、とても嬉しかった。すべてを知った今は、単純に喜ばなくなってしまうだけ。」

「銀髪に紫水晶色の瞳を持つ者は、セイルレーンが誕生してから二人しかいなかったという。」

「……うん、二人というのは、語弊があるかな。」

「だってそれは、この世界を創ったセイルレーン創造神様と、美と愛と豊穡の女神様の娘アルデ

イーナ様なのだから。

その話を聞いてようやく、人々が私を神々の一族の末裔と呼んだ理由がわかりました。神様と同じ、特別な色を持って生まれた私。だけど私はただの人間でしかないし、できることが限られている。

瘴気に苦しむ人達を前に色々と悩んだ私だったけど、自分にできることをしようと決めた。滋養のある食事を作ったり、部屋の換気を徹底したり、マスクを作ったり……

やがて瘴気は収束したけれど、オリヴィリア領に多くの犠牲者と悲しみをもたらした。

その後、私はある決意をしました。

それは、平凡に生きていくこと！

前世の感覚で生きてきた私には、今までいろんな火の粉が降りかかってきた。

でも、もし大切な人を巻きこんでしまったら？

私のせいで皆が傷つくのは、とても辛い。もしそんなことになったら、自分を許せない。

ずっと私を守ってくれた、大事な人達。今度は私が皆を守るため、目立たず、地味で平凡な人生

を歩んでいこう。

——なんて決意したものの、厄介なのが私の外見。

一目見ただけで、神々の一族の末裔だとバレバレなんだよね……

とはいえ、ここは魔法が使って精霊が存在する異世界セイルレーン。

そう、魔法で外見を変化させればいいんです！

さっそく髪と瞳の色を変える練習をはじめた私だけ……その持続時間は、なんとたったの数分。一日二十四時間のうち数分の変化では、お出かけもままなりません。

これも、すべては私の魔力のせい。

実は私、普通の人よりも魔力が高いみたいなんです。

それゆえに、制御が難しく……さつきシリウス先生にも『魔法の才能はあります。ないのは魔法の制御能力です』って言われちゃったしね。

数年前、旧領主城を倒壊させた過去もあるくらい……アハハ……

そんな私を見かねた、お父様とお母様。

ある日、二人は、私にある仮面の話を聞かせてくれた。

セイルレーンには、シエルフィールド王国の王家とアルディーナ家以外にも、神様の血筋だと言われている家がある。

その一つは、炎と鍛冶の男神様の血を引く、カイウェル王国のプロイス家。

このプロイス家のグエルさんという男性が、身につけた者の望む姿に外見を変化させられる『幻影の仮面』を造り出したのだという。

なんと素敵なことでしょう！

つまりその仮面さえあれば、私の髪と瞳の色もサッと誤魔化せるってことだからね。

私は、すぐさま仮面を欲しがった。

ただその仮面は神様が地上に遺した聖遺物として、すでにセイルレーン教会が回収しちやっ

たい。

しかし、天は私を見捨てませんでした！

なんと、幻影の仮面を造ったグエルさんが、シエルフィールド王国の王都ローレリアに滞在していたんです。王太子様の魔剣を造るために、しばらくはローレリアにいるとのこと。

もちろん、私は王都に向かいました！ 新たな幻影の仮面をグエルさんに造ってもらうためにね!!

だけど、そう上手く話は進まなかった。幻影の仮面の製作を断られてしまったの。今では、それも致し方なかったのだと理解しています。

だって、私は自分の望みをただ一方的に押しつけただけ。グエルさんに、すごく失礼なことをしてしまったのですから。

私は自らの浅はかな行動のお詫びに、侍女見習いとして、グエルさんのお手伝いをすることにしました。

そんなある日、なんと教会の息がかかった賊に、製作途中の魔剣を盗まれちゃったの！ なんとかこの事件が解決した後、どさくさに紛れて、幻影の仮面は私の手に渡りました。

もちろん、私がこの仮面を持つ許可はグエルさんにいただいているんだけど……

私は王都に滞在していたときのことを思い出し、大きなため息をついた。本当に、いろんなことがあったなあ。あれから半年以上が経ちました。

「今日の訓練はここまでにしましょう」

シリウス先生は静かにそう言い、幻影の仮面を私に差し出してくる。

仮面の額部分には紅水晶に似た淡い薔薇色の大きな石がはめこまれ、細部にまで美しい模様が施されている。

「シリウス先生、幻影の仮面を預かっていただきありがとうございます。でも、もうちょっと訓練をしたいです……ダメですか？」

私は、小首を傾げてシリウス先生に問いかける。

仮面の力でいつでも変身できるようになったからといって、グエルさんのご厚意に甘えてばかりいてはいけません。この仮面はいただきものではなく、あくまでも預かりもの。いつかは返さなくちゃならないのです。

だから私は、毎日シリウス先生と一緒に魔法の練習をしています。

その甲斐あって、以前は二、三分しか髪と瞳の色を変えられませんでした。今はなんと五分も持続するように！

……あんまり変わってないだなんてツッコミは禁止ですよ。自分自身がよくわかっていますから。がっくりと肩を落とせば、私の気持ちを映したみたいに陽の光が翳っていく。

シリウス先生は空を見上げた後、ため息をついた。

「根を詰めすぎるのもよくありません。今日はこのぐらいにしておきましょう。少しずつではあります。日々進歩しているのですから。また明日、頑張ればいいのです」

「……わかりました。明日は記録更新できるように頑張りますね」

そうだよ。日々頑張れば、結果は必ずとついてくる。
昨日より今日。今日より明日ってね。

私の気分が浮上すると、雲間からも太陽の光が現れる。
私はシリウス先生から幻影の仮面を受け取り、もう一人の自分を想像しながらそれを被った。
次の瞬間、身体が炎に包まれたように熱くなったものの、その熱はすぐさま過ぎ去った。

「よし、変身完了！」

再び池の水面を覗きこむ。そこに映っているのは、雪みたいな白金色の髪に、淡い薔薇の花に似た淡紅色の瞳を持つ少女。表情は、少し不安げだ。

「うん、今の、リリアナ・ラ・オリヴィリアの姿ですね」

自らの姿を偽らなくちゃいけないのは、ちよつと寂しい。

けれど、それも仕方がないこと。

だって、銀髪と紫水晶色の瞳のままでは危険だから。

とはいえ、チクリと心は痛む。

私はシリウス先生に水面を見られる前に、手でバシャリと水をかきまぜて映った姿を消す。

「お待たせしました、シリウス先生。さあ、おうちに帰りましょうか！」

それから私は、シリウス先生の魔法講座を受けつつ帰宅した。

「ただいま戻りました！」

「おかえり、リリアナにシリウス君」

元気よく領主館の扉を開けると、目の前にお父様がいた。その手には、紙が握られています。

これは……

「もしかして、お手紙ですか？」

「ああ、そうだよ。私も今、視察から戻ってね。視察先でちょうどリーシェリ商会の者と会って、我が家宛の手紙を預かったんだ。ちょうど受取人が目の前に現れたね」

お父様は、三通の手紙をひらひらと振る。

リーシェリ商会っていうのは、大商人ジルさんが纏め上げているとっても大きな組織。オリヴィリア家とも、懇意にしています。

それにしても受取人が現れたって、もしかして私宛の手紙なの？

私は自分を指差して首を傾げた。

するとお父様はにこやかに頷き、一通の手紙を差し出してくる。

「はい、リリアナにお手紙だよ」

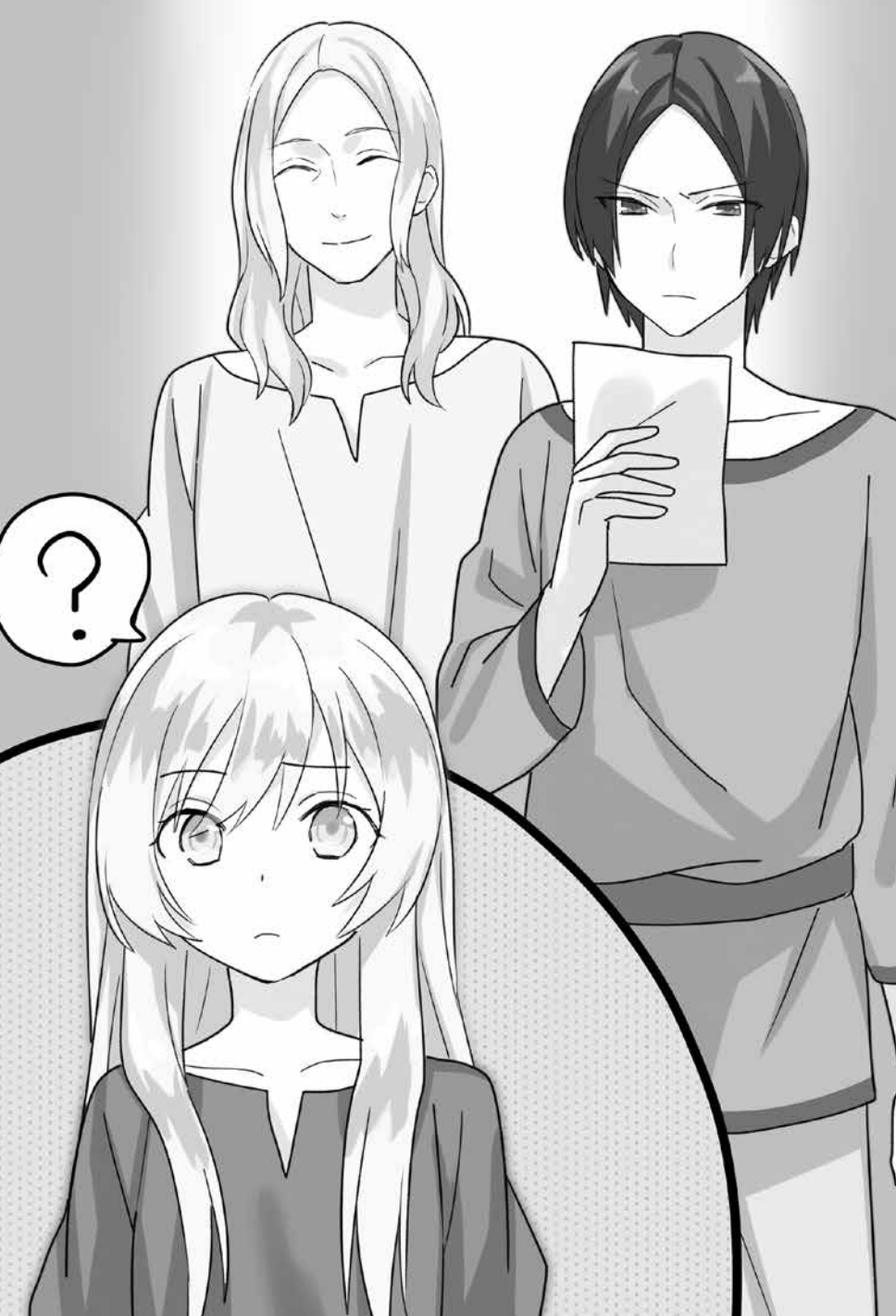
受け取った手紙には、差出人の名前が二つ書かれていた。

「うわあ、グエルさんとアオイ先輩からだ！ お父様、ありがとうございます!!」

幻影の仮面を造ったグエルさんと、その侍女のアオイ先輩。

思わぬ人物からの手紙に、私は思わず飛びはねて喜んだ。

手紙には何が書かれているんだろう。楽しみだな。



私は我慢ができず、さっそく封を切る。

封筒には、グエルさんとアオイ先輩それぞれの手紙が入っていた。

グエルさんからは、『アオイと夫婦になるために結婚式を挙げた』と簡潔に書かれた一枚の便箋。

一方のアオイ先輩は、便箋が三枚。

旅の途中で、聖域と呼ばれるセイルレーン教会の総本山に立ち寄ったこと。そこで結婚式を挙げたこと。グエルさんの簡潔な言葉を埋めるように、丁寧な字が並んでいる。

そして慕っていたグエルさんと結婚することができたのは私のおかげだと、感謝の気持ちがたくさん綴られていた。

うん、手紙の内容にも人柄が出てくるものなんだね。

何より、ご結婚おめでとうございます！ お二人はとっもお似合いだと思うよ。

私は頬を緩めながら大切な手紙をたたく、ポケットにしまう。

「グエルさんとアオイ先輩は、旅の途中で立ち寄った聖域で、結婚式を挙げたそうです。幸せそうな様子が手紙からも伝わってきました」

「それは良かった。あの二人ならば、とてもお似合いの夫婦になるだろうね。……そうだ。シリウス君、君にも手紙が来ているんだ」

お父様は微笑みながら、手にしていた二通の手紙のうち、一通をシリウス先生に差し出した。

シリウス先生は、訝しげな表情でそれを受け取る。

「手紙……。珍しい」

先生、自分で珍しいとか言わないでください。自虐ネタすぎて、つつこめないよ。

「ご家族の方ではないのですか？」

私が尋ねると、先生はすぐさま否定した。

「いえ、そんなはずはありません。家族に居場所を知らせていませんから」

そうか、シリウス先生はご家族に居場所を……って、ちよつと、それって逆にどうなんですか!? 愕然^{がくぜん}としている私の隣で、シリウス先生は手にしていた手紙をビリビリと開封する。そして封筒から取り出した手紙に藍色の目を向けて、険^{げわ}しい表情を浮かべた。

「シリウス先生、そんな難しい顔をしてどうしたのですか？」

「嵐が来る……」

シリウス先生は、ポツリと呟^{つぶや}いた。

「嵐、ですか？」

先ほど見た空は見渡す限りの青空で、とても嵐が来る気配はありませんでしたが……

「いえ、天候のことではなく——」

シリウス先生が言葉を紡ごうとしたとき、玄關の扉がドンドンと強く叩かれた。

「おや、お客様のようだね」

首を傾^{かし}げたお父様が扉に手をかけた瞬間——突風が吹き、扉はバターン！ と大きな音を立てて勢いよく開け放たれた。

私は目を開けていられず、両腕で顔を庇^{かば}う。

やがて、風は徐々に弱^よまっていった。

「リリアナ、大丈夫かい？」

「リリアナ様、お怪我^{けが}はありませんか？」

おそろおそろ目を開けると、目の前にはお父様とシリウス先生が立っていた。

お父様とシリウス先生が突風から守ってくれたんだね！

「怪我はありません。ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げた私に、シリウス先生が口を開く。

「それは何よりです。ただ問題は、そこにいる元凶^{げんきゆう}です」

元凶？

お父様とシリウス先生がいて前が見えなかった私は、二人の間からひよっこり顔を出して玄關の扉を見やる。

そこには、藍色の外衣^{ロウブ}に身を包んだ、八十歳くらいのご老人の姿があった。

短く切りそろえた白い髪に、細められた山吹色の目。優しいな雰囲気のご老人は、顔に喜色^{きしよく}を浮かべていた。

「ルイス様、シリウス、お久しぶりです」

「まさか、オリヴィリア領にいらっしやるとは思いませんでした！ お久しぶりですね!!」

お父様が嬉しそうに言う。

「おや、お二人に手紙を出したのだが届かなかったようだな。申し訳ない」

「手紙は無事に届いていますよ。ただ、つい先ほど受け取ったばかりで、私はこれから読むところだったので。それにしても、道理でシリウス君が『嵐が来る』と言ったわけだ。意味がわかりましたよ」

なるほど、お父様とシリウス先生が手にしている手紙の差出人は、このご老人だったんですね。そして確かに、お父様が扉に手をかけた瞬間、嵐みたいな風が吹きました。

お父様の今の言葉といい、あの突風は日常茶飯事なのかな……

「それにしてもシリウス、お前が人を庇うとは……。お前はいつだって自分の興味があるものにか心が動かず、己に対してすら無関心だったのに……」

しみじみと呟いたご老人は、お父様とシリウス先生の間から顔を覗かせる私に気づき、興味深げに見つめてきた。

「そんなにまじまじとリリアナお嬢様を見るのはやめてください。変質者扱いされますよ」

「いいじゃないか。減るもんじゃないだろうに」

「いいえ、減ります。それに、先ほどの突風はなんなのですか？ 怪我がなかったとはいえ、手荒

い挨拶ですね。アし、が言うことを聞くような存在ではないとわかってはいますが、もう少しなんとかしてほしいものです」

「仕方がないじゃないか。君は特別アしに好かれる何かを持っているのだろう。君に会えて、風はとても嬉しそうだ。断じて私の意思ではない」

「私は別にそれを望んではいません。そもそも私には、ただでさえ扱いにくいのが憑いているので

すから」

先生がそう口にするのと、玄関に置かれていた花瓶から水がびちゃびちゃと溢れ出した。さっきの突風でも倒れなかったのに……

「なっ、怪奇現象ですか!？」

魔法を使ったときのような違和感もなかったよね？ なんで!？」

もしかして、足がなくて透きとおって視えるという、『ゆ』ではじまって、『い』で終わるやつですか！

嫌だぁー！

ご老人の言っていた、シリウス先生を好いているアレはそれなんですか!？」

怖さのあまり、私はシリウス先生からじりじりと距離を取る。

先生の近くにいる、怖いアレに嫉妬されて呪われでもしたら笑えないですからね。安全地帯に避難させていただきます。

私が怖がっているのを察したのか、シリウス先生は不機嫌そうな声を上げた。

「外でやれ」

すると、外から嵐でも来たかのような轟音が鳴り響き——すぐに静かになった。

何、なに、もしかしてシリウス先生は幽霊を操れちゃったりするんですか!？」

ミステリアスすぎるよ!!

衝撃を受けて、思わず震えてしまう。ご老人はそんな私にそっと近寄ってきて、膝を折った。

「ご挨拶が遅れて申し訳ありません、リリアナお嬢様。私はジェレミー・アストリア。過去、リリアナお嬢様の父君に学問を教えていました。そしてシリウスもまた、私の不肖の弟子」

えっと、シリウス先生が弟子ってことは……

「ええー……！ 先生の師せんせいってことですかー……!?」

「そうです。認めたくはありませんが私の師せんせいです」

シリウス先生は淡々と言い、頷うなずいた。

「シリウス先生の師……。つまり、ジェレミーお師匠様ですね！」

そういえば、お父様はシリウス先生の兄弟子だと聞いたことがあります。

私の言葉を聞いたお父様は、何やら面白そうに微笑ほほえむ。

「ジェレミーお師匠様？」

「はい。ジェレミーさんはお父様の先生で、私の家庭教師シリウス先生の師でもあるのですから、私がお師匠様と呼んでもおかしくないと思うのです。弟子の弟子ってやつですね。ダメですか？」

私は了承を求めて、ジェレミーさんに尋ねる。

「これはこれは、まるで可愛い弟子が増えたかのようなだな。そう呼んでいただいてかまいません」

ジェレミーさん、あらためお師匠様は、相好そうごうを崩して言った。

「良かった。領主館によくおいでくださいました、ジェレミーお師匠様！」

「それはそうと、なぜオリヴィリア領に？」

せっかくお師匠様が来てくださったのに、その言い方はいくらなんでも冷たいですよ、シリウス

先生。

そんなシリウス先生の態度にはかまわず、お師匠様はにっこりと微笑んだ。

「あの事件以降、オリヴィリア領に身を隠した愛弟子まなでしがなんの便りもよこさないから、様子を見に来た。手紙にも、そう書いただろうに」

あの事件って、もしかして――

「シリウス先生、あの事件って――世界は太陽を中心に回っているっていう、あの説……えっと……」

「旋回説せんかいせつです」

そうだ、旋回説！

地球で言うところの地動説のことです。

シリウス先生はその旋回説を説いたことにより、王都にいられなくなりました。

神話には、世界のすべてはセイルレーンを中心にまわっているとの記述がある。それを覆くつがえしてしまう説を発表したシリウス先生は、セイルレーン教会から反逆者の扱いを受けたみたい。

やがて王都にいられなくなり、お師匠様のすすめもあって、兄弟子であるお父様のいるオリヴィリア領にやってきたのです。

教会の扱いには許しがたいものがあるけれど、その事件のおかげでシリウス先生は私の家庭教師になった。シリウス先生と出会えて、私はとっても嬉しく思っています。でも、複雑ですね。

「リリアナお嬢様があの事件について知っているとは驚いた。それは、シリウスが語ったのです

か？」

「はい、そうです」

正確には、この世界にはない地動説を私がうっかり口にしちゃったことで、話を聞くことになっただけだ……

正直に言えば面倒なことになるのは目に見えています。わざわざ自爆しないでいいよね。

お師匠様は私とシリウス先生の顔を交互に見ると、ニヤリと笑う。

「なるほど。実に興味深い」

私はハンターに見つかつた獲物のように、思わず身をすくめた。

一方のシリウス先生は、眉を寄せて言う。

「なんですか、その笑みは」

「いやいや、それ以外に道がなかったとはいえ、シリウスにリアナお嬢様の家庭教師をすすめたことを心配していたんだ。何せ、お前は子供が大嫌いだからな。だが、旋回説を自ら語るほどの仲なのだと安心したよ。杞憂であつて良かった」

うん、確かにシリウス先生は子供嫌いですよね……

私の親友ミーナちゃんへの態度も大人気ないし、絶対零度の冷たさだもの。あ、でもアル君とは仲良くしているよね。お話ししたり、勉強を見てあげたり。

私が旧領主城を倒壊させてしまった誘拐事件。それをきっかけに仲良くなったアル君を思い出していると、お師匠様がお父様に向かってにつこりと微笑んだ。

「ルイス様、不肖の弟子シリウスを家庭教師として迎え入れてくださり、ありがとうございます」

「いえ、私も弟弟子の危機に手を差し伸べることができて良かった。何より、リアナは彼が家庭教師になってくれたことを誰よりも喜んでいきますからね」

「はい、シリウス先生が私の先生になってくれて、とても感謝しています」

それにしても、ご縁というのは不思議なものだね。二人がお師匠様の弟子でなければ、私がシリウス先生と出会うことはなかったでしょう。

思わず笑みをこぼした私に、ジェエミーお師匠様は感慨深げに言った。

「そうでしたか。それは良かった……」

「ところで、師はしばらく滞在なさるのですか？」

お父様が尋ねると、お師匠様はゆっくり頷く。

「ご迷惑でなければ二日滞在させていただきます、三日目の朝に出発したいと思っています」

「歓迎しますよ。それに、師は早々にしたいことがあるのではありませんか？」

お父様はお師匠様の顔を見ながらニヤリと笑う。

「いいのですか？」

「ええ、もちろん。それでこそ、師ですよ。うちは他にないようなものまで集めているので、きっと満足していただけるかと思えます」

お父様の言葉を聞き、ジェレミーお師匠様はまるで少年みたいに瞳を輝かせた。

私は意味がわからず、お父様の服の裾を掴んでくいと引っ張る。

「お父様、なんのことでしょうか？」

「あはは、今にわかるよ。シリウス君、師の案内役をお願いしてもいいかい？」

「はい」

「ありがとう。リアアナも、気になるのならついていくといいよ。……すごいからすごい？ 一体、どういうことでしょうか？」

「そんなふう言われたら、とっても気になっちゃいます。」

「ぜひ、私も一緒にしたいです！」

「では、行きましょう」

シリウス先生は、お師匠様と私を先導して歩き出した。

お父様は、にこにこ手を振りながら見送ってくれる。

「師よ、また明日にでもお会いしましょう」

え？ 明日？

お師匠様は領主館に滞在することになったのに……明日ってどういうことですか！

シリウス先生に案内されて辿りついたのは、意外な場所だった。

「図書室？」

室内の壁一面には様々な本が並び、静謐で厳かな空気に満ちている。

首を傾げた私に、シリウス先生が説明してくれた。

「はい。師は人の屋敷を訪ねると、そこにあるすべての本を読みあさるのです。知識に貪欲で、人は師のことを『貪婪な知識欲を抱く者』と呼びます」

貪婪な知識欲を抱く者……それはまた、すごい二つ名をお持ちですね。

しかも、二日間しか滞在しないのにすべての本を読むなんて、できるのでしょうか？

無謀に思えるのですが……

私は、チラツとジェレミーお師匠様を見やる。お師匠様は、目を輝かせながら本を手に取り、ブツブツと呟いてはまた棚に戻している。

「本は知識の泉。ルイス様が自慢するだけある。どれも素晴らしい本ばかりだ。これは当時の王への風刺が過ぎると焚書となったもの……こちらは一握りの高位聖職者しか読むことができない、神々の生活を描いた稀少本。実に良い本が溢れているじゃないか！」

我が家の図書室にそんな価値のある本が並んでいたなんて、知りませんでした！

他のお宅の図書室を見たことがないので、つきり普通の本だとばかり思っていたのですが……

「師よ、この図書室には稀少本に加えて、オリヴィリア料理と呼ばれるレシピ本など、様々な分野の本がそろっています。師の知識欲も満たされるでしょう」

「それは読む前から楽しみだな」

「外衣をお預かりします」

シリウス先生はお師匠様に近づき、外衣を受け取る。

外衣を脱いだお師匠様は、老人とは思えない肉体をお持ちだった。袖口から覗く腕は大きく盛り

上がり、服で隠れている部分もがっしりとしている。おそらく、鍛え抜かれた強靱な身体つきをしているのだろう。筋骨隆々という言葉がふさわしい。

「なっ、なんですかアレは!？」

私は驚きのあまり、ジェレミーお師匠様を指差してしまった。

だって、外衣ロウブの中がボディビルダーみたいな肉体だなんて、誰が予測できたでしょうか。それも、八十歳くらいのお爺ちゃんですよ。驚くなっというほうが無理な話だよな。

「師は相当な変わり者なのです。師に言わせると、あの肉体も学者には必要なのだとか。……私には理解できませんが」

学者さんに筋肉つて必要でしたっけ？

偏見へんけんかもしれませんが、むしろ学者さんって筋肉とは真逆の線が細いイメージなのに!!

目を丸くしていると、お師匠様は満足げに頷うなづいてこう言った。

「では、私はさっそく本を読ませていただきます」

「ジェレミーお師匠様!？」

こちらの戸惑いなどものともせず、お師匠様は本棚の一番端っこの本を手に取り、そのまま胡坐あぐらをかいて読みはじめる。

しかも、読むペースがとつもなく速い。ただペラペラとページをめくっているようにしか見えません。

もしかして、速読つてやつ!？」

図書室の本を二日で読み切るなんて無謀むぼうだと思っていたけど、この速度だったら可能かも……

「リリアナ様、無駄です。ああなっってはもう誰にも止められません。すべての本を読み終えるまで、師は図書室から動かないでしょう」

「すべての本を読み終えるまでって、結構な蔵書数ですよ！ それって、あくまでもたえですよね?」

さすがのお師匠様も、お腹がすいたり眠つたりするときくらいは、図書室から出てきますよね。そうじゃなきゃ困るよ。

だってこの図書室には、アレがあるのに……

「いいえ、たとえばなどではありません。師は分野も関係なく、すべての書物を読みあさる雑食なのです。そしてあの筋肉は、飲まず食わず眠らずに書物を読みふけても平気なようにと鍛えられたもの。他の者には無理でも、師は蔵書すべてを読むことが可能です」

飲まず食わず、しかも眠らずって……ああ、だからお父様は、先ほどお師匠様に「また明日にでもお会いしましょう」と言ったのですね。

「そんなことをせずとも、本は逃げたりしないのに……」

「そうなのですが、いくら言っても聞かないのです。ならば、本人の好きなようにさせるしかありません」

「そんな……」

私は、この図書室に『あるもの』を隠している。

それは、私の日記。

でも、ただの日記じゃない。

前世と同じ感覚で行動してはダメだと悟った日から、自分の発言や行動には慎重になった。だけど、時には『こうしたらいいのに、ああしたらいいのに』と思ってしまうことだってある。ただし、それらは決して喋ってはいけないこと。

捌け口がないせいで、心の中にモヤモヤが溜まっていく一方だった。

そこで、思いついたのが日記。

日記なら自由に書き記せるし、きちんと隠してさえいれば誰にも見られずにすむ。

こちらでの生活やいろんな出来事について、前世の日本に存在した様々な道具について——私は気の向くままに日記を書いていた。

自室には、掃除などで使用人の皆さんが出入りする。だから、日記の隠し場所には図書室を選んだんだけど……

ほらっ、木の葉を隠すなら森の中って言いますからね。

普段、図書室には鍵がかかっている、その鍵を持っているのはお父様とお母様、シリウス先生、私の四人だけ。

もしお父様とお母様が私の日記を見つけても、二人は私が転生者だと知っているので問題はない。それに、万が一誰かに見られても大丈夫なように、セイルレーンの言葉ではなく日本語を使っている。お父様とお母様は日本語をはじめて見たとき、暗号や記号みたいだと言っていた。きつと、

この世界の皆は意味を理解できないでしょう。とどこどこに描いている絵は、ラクガキだと言って誤魔化せそうだし。

シリウス先生は私が転生者だと知らないけれど、読む本の分野は決まっている。だから、シリウス先生が絶対に読まない分野の本棚に隠してあるんです。

だけど、まさか図書室にこもって、端から端まですべての本を読もうとする猛者が現れるとは……

わかっていたら、お師匠様が図書館に向かうのを少しの間妨害して、日記を回収したのに。仮に日記を見られたとして、日本語を理解できなければ問題ない。

でも、もし解読されてしまったら……

だってジェレミーお師匠様は、私の尊敬するお父様とシリウス先生の師。知識を得るために肉体まで鍛えあげ、貪婪な知識欲を抱く者とまで呼ばれる人。

私じゃ足元にも及ばない、何十年分もの知識を持っている。そのあらゆる知識を総動員すれば、内容を知られてしまうかもしれない……

私は恐怖に身を震わせた。

「リリアナ様、寒いのですか？ 師は放置して問題ありません。自室に戻りましょうか？」

シリウス先生がそう声をかけてくれる。

寒いのではなく、日記が心配なんです……あ、そうだ、回収は今からでも問題ないはず！

私は、動揺する心を落ち着かせるために深呼吸する。

「いえ、大丈夫です、シリウス先生。お気遣いありがとうございます。そういえば、前に図書室に来た際、忘れものをしてしまったんです。取ってくるので、ちょっと待っていてください」

私はゆっくりと図書室の奥へ進み、ある本棚の一番下の段に手を伸ばして、数冊の本を抜き取った。

よし、あとはこの空いたスペースの奥に――

「リアナお嬢様、どうしたのですか？」

「きゃあー！ー！！」

突如、背後より声をかけられて、私は悲鳴を上げる。

手にしていた数冊の本が、バサバサツと音を立てて床へ落ちる。

振り向くと、すぐ後ろにジェレミーお師匠様の姿があった。

「なっ、なんでジェレミーお師匠様がここにいるんですか？ 先ほどまで、扉の側で本を読んでいただけありませんか」

声をかけられるまで、足音はもちろん、気配もなかったのに……

だんだん、ジェレミーお師匠様という人がわからなくなっていくよ。

恐ろしい人っ！

「いえいえ、見られたらマズイ本を、こっそり持ち出してしまう人もいるのですよ。それを防ごうかと……」

まさにその通りです！ 鋭すぎます！！

お師匠様は肉体だけではなく、野生の勘も鍛えたに違いありません。

どうしよう……正直に日記を見られたくないって言ってみようかな。

日記はプライベートなものだし、さすがに持ち出しを許してくれるよね。

私が口を開こうとした瞬間、お師匠様が先に言葉を発する。

「中には、日記や手記を見られるのが嫌だという者もいます。これらも、大切な知識なのに。そういった場合、お願いし続けると首を縦に振ってくれますがね」

「都合のいい言い方を……。相手が頷くまで毎日どこまでも追いかけてまわすんですから、ある意味脅迫ではありませんか」

私達の傍にやってきたシリウス先生が真実を語る。

うわぁ、それってストーカー行為ですね。

恐ろしい……

私、本当のことを言わなくて良かったよ。

日記を隠していると知られたら、私も追いまわされちゃうよね。

それこそ、大変なことになるところだった。

女の子には秘密がいつばいなんです。そっとしておいてください。

「安心してください、ジェレミーお師匠様。何も隠しているものなんてありません。私はただ、お母様からオスメされた本を読んでみるつもりだったんです」

私は笑顔が引きつらないよう気をつけながら床に落ちた本を拾い、お師匠様に見せた。

すると、ジェレミーお師匠様はニヤニヤと笑う。

「リリアナお嬢様もお年頃ですから、そういった本に興味を持つのも仕方ないのかもしれないね」

なんで、そんなにニヤニヤ笑っているの？

私は首を傾げて、自分が手にしていた本のタイトルに目を落とす。

そこには、『気になるあの人と恋人になる方法』『彼を射止めるための黒魔術』といった文字が並んでいた。

何っ、これっ!? こんな興味ないよ!!

「いや、あの、違うんです。たまたま間違えただけです!」

驚いた私は、一生懸命に首を横に振って否定する。

そうだった。シリウス先生が絶対に読まない本……すなわち恋愛に関する本の棚に日記を隠したんだった!

まさかこんな形で、取りつくりう羽目になるなんて。

あたふたする私に、シリウス先生が訝しげな表情で尋ねる。

「リリアナ様、忘れものをしたのでは?」

「これ、シリウス。花も恥ぢらう年頃の娘さんに、そんな野暮なことを聞いてはいけない。ここは見えぬふりが一番だ」

違いますから! むしろ、もっと気恥ずかしくなっちゃうのでやめてください!!

「この本は、かなり参考になりますよ。すでに読んだことがあるので、自室に持っていかれても大丈夫です」

お師匠様はにこやかに笑いながら、私の手にしていた一冊を指差す。

「だから、違いますってば!」

私は数冊の本を急いで棚に戻した。

棚の空間が空いたままだと、私の日記の発見度が上がっちゃいますからね。

どうか、見つかりませんように!

それにしても、お師匠様……本当に、いろんな分野の本を読んでいるんだね。これで実証されたよ。

「では、ジェレミーお師匠様のお邪魔をするのもなんですし、私達は失礼しますね。行きましよう、シリウス先生」

私は早口でそう言って、シリウス先生の服の袖を引く。

うう、なんとしても、後で日記を回収しなくてははいけません。

フッフッフ、覚悟してくださいね、ジェレミーお師匠様。

でも今は一時、戦線離脱です!

ジェレミーお師匠様が図書室にこもって、数時間が経った。

そろそろ夕食の時間なんだけど、シリウス先生の言葉通り、お師匠様は一向に出てこない。

私は、図書室の扉をトントンと叩く。しかし、室内からはなんの反応もなかった。もしかして、図書室にいないのかな。

だったら、日記を回収するチャンスだよな？

わずかに期待して中に入ると……暗闇の中に、かすかな光を放つ球がゆらゆら浮いていた。

「きゃあーーーーー！！ 幽霊い！！」

恐怖のあまり、足が竦すくんでしまう。

無情にも、光の球は消えるどころかこちらへと徐々じょじょに近付いてきた。

「ヤダ、ヤダ、ヤダアーーーーー！！ こっちに来ないでえ！！」

やがて球が目の前にやってきたとき、ある人物の姿が浮かび上がった。

「リリアナお嬢様、幽霊ではありませんので落ち着いてください」

「えっ、ジェレミーお師匠様？」

私は拍子抜けして、ばちくりと瞬まばたきをする。

お師匠様は、私を安心させるように笑って頷うなずいた。

「もう、ビックリしました。図書室の燭台しよくたいに明かりを灯ともしていただいて構わないのに。その光だけ

では、暗くありませんか？」

よくよく見ると、宙に浮かんでいたのは魔法で出した光球ひかりたまごだった。ちよつとした明かりのかわりに、私も使うことができます。

だけど、一人きりの図書室に光球しかないなんて……暗くて怖いよね。私には耐えられません。

「本さえ読めればいいと、自分のまわりだけ明るくしていたのです。驚かせてしまったようで申し訳ない。ところで、なんのご用かな？」

そうでした。びつくりしすぎて、大切なことを忘れていました。

「今日はお師匠様がいらっしゃったので、腕うでによりをかけて美味しい夕飯ゆふめしをご用意しました。私の手作りですよ」

「ほほう、噂うわさのオリヴィリア料理ですか」

噂のオリヴィリア料理？

……嫌な予感がある。私は、思い切って尋ねてみることにした。

「えっと、ちなみにそれは、どのような噂なんでしょうか？」

「四、五年前、見たことも聞いたこともない料理が数多く発表された。それらは『神々の食卓の料理』もしくは『オリヴィリア料理』と呼ばれ、今では他国にまで広まっている。私もはじめて食べたときには、あまりの美味しさに驚愕きょうがくしました。やがて、オリヴィリアは美食の地として有名になった。ここ最近、新たなレシピは出回っていませんが……せつかくオリヴィリアに来たのですから、是非とも本場の味を食したいものです」

ジェレミーお師匠様はにこやかに言った。

私が最初にオリヴィリア料理を作って広めてしまったことについては、特に噂になっていないみたい。私は、ほっと胸むねを撫なで下ろした。

「楽しみにしていただけで何よりです」

シリウス先生は、お師匠様が寝食を忘れて書物を読みあさると言っていた。どうなることかと思っただけ、さすがのお師匠様も、美味しいご飯の誘惑には勝てないらしい。人間、食欲にはなかなか勝てない生き物ですよ。

私だって、前世では何度もダイエツトに挑戦し、そのたびに失敗していました……
何はともあれ、餌付け作戦、成功です！

よし、いざ食堂へ！！

「皆、食堂でお師匠様をお待ちです。さあ、行きましょう！」

私はお師匠様の太い腕を掴み、ぐいぐいと引っ張る。

ただど逞しいお師匠様の身体は、びくともしなかつた。
あれっ？

「申し訳ありません、リリアナお嬢様。オリヴィリア料理の生みの親だと囁かれるお嬢様が自ら作ったご夕食……いただきたいのはやまやまなのですが、いつ果てるかもわからぬこの身。なれば、目の前の知識を少しでも吸収することが先決なのです」

「……今、なんと？」

聞き捨てならない言葉が出てきた気がするのですが……

「ですから、いつ果てるかもわからぬ身。なれば、目の前の知識を——」

「違います。そこじゃなくって、もっと前！」

「えっと……オリヴィリア料理の生みの親だと囁かれるお嬢様が自ら作ったご夕食……ですか？」

「そう、そこです！ なぜ、私がオリヴィリア料理の生みの親ということになっているのでしょうか!?」

うう、私のいろんな噂が出回っているとは聞いていましたが……一体どこまで広まっているの……！

「嘘か本当かは存じませんが、まことしやかに囁かれています。また料理にとどまらず、様々な分野でリリアナお嬢様の名前を耳にしますよ。ここ数年、そういった類の新たな噂はないようですが料理については、オリヴィリア領とリリアナお嬢様の名が一緒になって他国にも轟いています」
うん、間違いではないんだけどさ。

確かに、後先考えずに私がやっちゃったことだし……でも、せめて私の名前は噂から消えてくれたらいいのに……

「そうなのですね……」

がっくり肩を落とすと、ジェレミーお師匠様はにこにこ顔く。

「はい。この図書室には、オリヴィリアにまつわる様々な本が収蔵されていますね。私は、噂のリリアナ様についても気になっています。すべての本を読み終わった暁には、是非お話をしたいものです」

お話って、なんだか尋問されそうな気がしてならないのですが……

嫌な予感がビシバシします。

「それでは、私は本を読むのに専念するので、失礼いたします。ルイス様と奥方様にも、よろしく

お伝えください」

お師匠様は私を部屋の外に押し出し、バタンと扉を閉じてしまった。
餌付け作戦失敗。

KO負けですね……

私は屍のように重たい身体を引きずって、図書室を後にした。

夜も更けた頃、私は自室にてニヤリと笑った。

たぶん、今の私は随分と悪い顔をしていることでしょう。

「フツフツ、忘れてはいけません。私には素敵アイテムがあることを！」

自室にいる今、私は本来の姿に戻っている。

手元には、紅水晶にそっくりな薔薇色の石がはめこまれた仮面。

そう、幻影の仮面です。

自らの望む姿に変身できる、奇跡のような仮面。

この仮面を上手く使うことができれば、ジェレミーお師匠様に気づかれることなく、日記を回収できるに違いありません。

「うーん、だけど何に変身すればバレないかな」

まず図書室に入る方法を考えなくちゃ。

窓はあるものの鍵がしまっているし、外からは侵入できないでしょ。

そうになると、やっぱり扉を使うしかない。

だけど、堂々と入ったらジェレミーお師匠様に気づかれちゃうよね。

扉と床の隙間から侵入すると……うん、蟻ぐらいのミニミニ小人サイズになれば、きっと通れそう。

無事、図書室に入った後は、またサイズを変えなきゃ。

だってミニミニ小人サイズのままじゃ、目的の日記がある棚に行くまで時間がかかる。何より力
が足りなくて、日記を回収できないものね。

よし、小動物くらいの小人サイズになろう。

日記を回収したら、急いでまた扉の下から……ううん、ダメだ。

日記は厚みがあるし、たぶん通れない。

となると、窓の鍵を開けて外に日記を落とすとか？　そして鳥になれば、日記を回収して飛んで
逃げられるよね。

いや、でも窓を開けると、小人サイズのままじゃ難しい。もっと大きくならなくちゃ。

その場合、ジェレミーお師匠様に気づかれてしまう可能性が高いんだよね。何せ、あんなに勘が
鋭いんだもの。

うう、幻影の仮面に変身すれば楽勝だと思ったのに……

図書室からの日記奪還ミッションは、思いのほか難易度が高いかもしれない。

どうにかして、普通に侵入できればいいんだけど……

——あつ、そっか。違う人に変身すればいいんだね！
私は幻影の仮面を手に、ある人の姿を思い描く。

すると、炎に包まれたような熱さが全身を襲った。だがそれも一瞬のことで、すぐさま熱は過ぎ去っていく。

よし、変身完了。

どれどれ、上手く変身できたかな？

私は、ドキドキしながら姿見の前に立つ。

そこに映し出されたのは、鴉の濡れ羽色の髪に、深海のような藍色の瞳を持つ男性。表情からは、どこか冷たい印象を受ける。

「やった！ ちゃんとシリウス先生の姿になってる！ 成功ですね!!」

嬉しさのあまり満面の笑みを浮かべると、姿見にもにっこり笑ったシリウス先生が映る。

「うわぁ、先生がにこにこすると、こんな表情になるんだ。大発見」

本物じゃないけれど、シリウス先生の満面の笑みが見られるなんて……すごく貴重ですよ。ただ、いつもの私みたいにへらへら笑っては、ジェレミーお師匠様に怪しまれるだけ。

何せシリウス先生は、無表情が標準装備ですからね。気をつけなくっちゃ。

無表情、無表情、無表情——

呪文のように心の中で繰り返すと、鏡の中のシリウス先生は、やがて表情をなくしていった。

「よし、作戦決行です！」

私は部屋を出て、図書室に向かう。

なるべく足音を立てないようにしながら歩き、やがて目的地に辿りついた。

緊張しつつ、鍵穴にそつと鍵を差しこむ。ゆっくり回したら、ガチャリと音が鳴った。

……結構、音が響くね。

たぶん、もう気づかれていますらうな。

だけど、慌てても仕方ない。ここは正々堂々と、落ち着いて行動しなきゃね。

何せ、今の私はなりきりシリウス先生なんだから。

私はドアノブに手をかける。扉は、ギーと音を立てながら開いた。

室内には先ほどのように、ゆらゆら揺れる光の球が浮いている。

その光の側には、案の定、胡坐をかきながら本を読んでいるジェレミーお師匠様の姿があった。

うん、お師匠様のいる位置からして、まだ私の日記がある棚まで進んでいないみたい。

「どうした、シリウス？」

お師匠様は、本から目を動かさずに尋ねてくる。

少しもこちらを見ないけど、きつとこの部屋に入ったときからシリウス先生の姿をとらえていたんだらうな。

私は気づかれないように小さく息を吐いた後、答えた。

「リリアナ様が、やはり先ほどの本を読みたいとおっしゃられたので、取りに来たのです。私のことは気にせず、そのまま書物をご覧ください」

私の名譽のため言わせていただきますが、本当は読まないよ。だけどそうでもしないと、上手く誤魔化せないとと思う。

シリウス先生が恋愛関連の本棚に用があるなんて、怪しすぎますからね。ただ、これでお師匠様には完全に誤解されちゃったな。うう、ミッシヨンに多少の犠牲はつきものですよ。

「うむ、わかった」

どうやら、お師匠様はすんなり信じてくれたみたい。

ふう、第一関門クリア。不審に思われず良かったです。

私は喜びが表情に出ないよう気をつけながら、目的の棚の前に辿りつく。

さて、まずはこの本を取って——と。

……あれ??

さつき本を置いたとき、私、こんなに綺麗に並べたっけ?

からかわれているような雰囲気嫌いで、むしろ乱雑にしまった気がするのに。……いやいや、気のせいだよ。

綺麗に並べられた本に手をかけたとき、お師匠様が声を上げた。

「なあ、シリウス。あの話、どう思った?」

「あの話、ですか?」

それ、なんのことですか——!

もっとヒントをください!!

「手紙に書いただろ」

手紙って……本物のシリウス先生が読んでいたアレのことですか!?

私は偽者で、手紙を読んでいないからまったくわかんないよ。

うう、進退窮まったかも……

冷や汗をかいていると、お師匠様が口を開いた。

「シリウスが王都にいられなくなったのは、神話を根底から覆すような旋回説を説いたからだ。あのまま王都にとどまれば、異端審問にかけられて、下手をしたら命はなかっただろう。しかし、今はもうあの時とは違う。それにお前、半年ほど前に王都へ出向いたそうじゃないか。ここへ来る前に王都に立ち寄ったが、知り合いがお前を見たと言っていたぞ」

半年ほど前といえば——幻影の仮面を手に入れるため、王都ローレリアに行ったときのことだ。確かに、シリウス先生にも同行してもらったよね。

「お前のことだ、自ら危険に飛びこむ真似はすまい。王都に行ったのは、確かめたかったからだろう。あれから五年——自分の存在が教会の標的になったままなのかどうか。確認するには、ちょうどいい頃合いだった。だからこそ、ルイス様も止めなかったのだろう」

そういえば、シリウス先生は王都でたびたび留守にしていました。

私は呑気に、昔のお友達に会いに行っているのかと思ってたけど——

かつて先生が王都を追われたこと、すっかり失念していたよ。

もしあのとき、シリウス先生の身がセイルレーン教会に渡っていたら……

私はできるだけ無表情でいようとしたが、身体が小さく震えてしまう。

私、自分のことだけじゃなくて、もつと人のことまで気遣える人間にならなきゃ。

「無事、確認はできたようだな。お前が王都にいても、教会は動かなかった。これが答えだよ。……同じ頃、王都の教会上層部で何やら採め事があったらしいから、それどころではなかっただけかもしれないがな。加えて、聖域にはいわくつきの精霊巫女様がいる。俗世のことにあれこれ口出しされて、教会は手を焼いているようだ。きつと、シリウスにかまっている暇などないだろう」

教会上層部での採め事——きつと、あのことだ。

私も運悪く巻きこまれてしまった、王太子様の魔剣盗難事件。

その黒幕は、王都ローレリアの教区を受け持っていた司教だった。

シエルフィールド王国の王族は、神の血を引いている。そのため他国以上に民が王族を崇める傾向にあり、教会はそれが気に食わなかった。そこでローレリア司教は、王宮と教会を表立って対立させようとしたんです。

だけど結局、事件は公にならず、内々で処理された。犯人のローレリア司教は教会から破門され、聖域にある重罪人の牢に収容されているみたい。

この事件の真相を知っているのは、ほんの一握り。

もしシリウス先生が教会に連行されることがあったら、この事件を取引材料にして解放してもら

いますね。本当はそんなことしたくありませんが、背に腹はかえられません！

それにしても、いわくつきの精霊巫女様ってどういう意味だろう？

聞いてみたいけど、もしそれがこの世界の常識だったら不審に思われちゃうよね。我慢、我慢。

今の私は、なりきりシリウス先生なんだから！

「あのときは、王都にいられなかった。だが、今は違う。どこにも自由に行ける身——シリウス、家庭教師を辞めて、王都に戻ってはどうか？」

シリウス先生が家庭教師を辞めるなんて……嫌だよ！！

「そんな！」

私は想像もしていなかった展開に、思わず声を上げてしまう。

でも、ジェレミーお師匠様は違う意味に取ったみたい。

「シリウス。私の知っている五年前のお前とは、少し変わったようだな。リアナお嬢様の傍は、よほど心地よかったのだろう。だが、お前は探究心が強い。オリヴィリア領が以前より発展したとはいえ、学問の中心地はやはり王都だ。それに、多くの情報だって集まる。お前ほどの人間を、ここで燻らせておくのはもったいない。私は、お前がここで終わるような人物ではないと確信しているんだ」

オリヴィリア領で終わるような人物ではない……

そんなこと、私が一番わかっています。でも……

「私はな、お前の兄弟子であるルイス様が王都を出られたときに、随分と後悔したのだよ。彼は優

秀な弟子で、アルディーナ大公爵家の継嗣だった。間違いなく、国を背負っていく人物の一人。周囲もそれを望み、ルイス様にはそれに応えるだけの力があつた。しかし大公爵夫人がご令嬢を生んだとたん、追い出されるように様々な権利を放棄させられ、辺境の地オリヴィリアへ追いやられた……あのときのルイス様は、いつそ清々しそうでもあつたがな。とはいえ、ルイス様が大公爵位を継がれていれば、今のアルディーナ家の腐敗もなかつただろう。現大公爵も、かつては聡明で将来を囑望されていたというのに……」

以前、お父様から聞いたことがあります。アルディーナ家の嫡子だったが、妹の誕生をきっかけに、すべての権利を放棄して、彼女に譲渡したと。

だけど今の話だと、自らの意思ではなく、周囲に翻弄された上、オリヴィリア領を継いだように聞こえた。

……そういえば王都に滞在していたとき、国王陛下の生誕祭で、アルディーナ家だと思われる女性と女の子を見ました。

そのときお父様は、今まで見たことがないくらい憎悪を浮かべていた。やっぱりあのときの表情には、色々な事情があつたんだね……

思わず考えこんでいると、ジェレミーお師匠様は続けた。

「私は、非常に後悔している。あのとき、一介の学者にすぎない私にできることは、ほとんどなかった。しかし今回は違う。シリウスが王都に戻るのを手助けできる。人には、適材適所があるんだ。ルイス様がアルディーナ大公爵家に戻るのは難しい。だが、シリウスはいつでも戻れるという

ことを忘れないでほしい」

……本当は行つてほしくありません。

でもシリウス先生は、いつまでもこんな田舎にいていい人じゃない。

それは、痛いほどよくわかっています。

私も大人にならなくてはいけませんよね……

「……わかりました」

私は重々しく、了承の言葉を吐き出した。

先生なら、間違いなくそう言うに違いないから……

すると、暗闇から安堵のため息が聞こえてくる。

「そうか。わかってくれたようで何よりだ」

私は一刻も早くここから逃げ出したいくて、柵の空いたスペースに手を突っこむ。

指先に触れた本を掴んで引つ張り出すと、表紙には『リアナの日記』とセイルレーンの文字で

書かれている。

よし、目標物発見。

私は日記が見つからないように、恋愛に関する本と本の間に挟んだ。

「では師よ、目的の本があつたので失礼します」

走り出したい気持ちをおさえ、私は足早に図書室を後にした。

自室に戻る際、私が歩いた廊下には涙のしずくが点々と落ちていた。